平和への願いを込めて

～平和都市宣言推進事業「平和の旅」～

8月6日㈫、野々市・布水両中学校から14人の生徒が広島市の平和記念式典に参加し、平和への祈りを捧げました。式典前日の5日㈪には、原爆の子の像の前で布水中学校の松井優大さんが自身の思いをつづった平和宣言文を読み上げ、平和への誓いを新たにするとともに、市内小中学校や市民から寄せられた折り鶴を捧げました。

生徒2人の感想文を紹介します。

大切なもの

野々市中学校3年　平野　巧人

「国や文化や歴史、違いはたくさんあるけれど、大切なもの、大切な人を思う気持ちは同じです。みんなの『大切』を守りたい。」

これは、平和記念式典での、広島市内の小学生による平和への誓いの一部です。僕は、平和の旅を通して、この言葉が一番胸に刺さりました。

市民全員の「大切」な町、広島は、七十四年前、たった一発の原子爆弾によって、廃墟となりました。僕は、原爆ドームを目にし、被害の大きさを直に感じて、衝撃を受けました。また、平和記念資料館で、皮膚が剥がれた人や、がれきの山と化した都市の写真を見て、戦争の悲惨さに悪寒が走りました。そして、折り鶴タワーの頂上から、「今」の広島の景色を眺めながら、現在の平和の大切さに改めて気づかされました。

今でこそ、日本の平和は保たれています。しかし、世界に目を向けると、各地で紛争が起き、国家間の対立が深まっています。

全人類が望む、大切なもの。それは、「平和」です。日本は、世界で唯一の被爆国として、原爆の悲劇を二度と繰り返さないために、核兵器の廃絶を訴え続けなければいけません。そして僕たち若者は、悲惨な過去を決して忘れず、原爆、また戦争の恐ろしさを後世に語り継いでいく必要があるのです。

原爆の子の像を訪れたときの様子

命と言葉の重さ

布水中学校3年　吉村　真愛

今の時代、一日に二回以上は必ずと言っていいほど「死ね」「殺すぞ」という言葉が聞こえる。これは決して当たり前になってはいけないことなのに、多くの人がそれを無視している。私は二日間広島に行って、今の日本人は言葉を軽く受け取りすぎていることに気付いた。

広島県に原爆が投下されて七十四年、私は初めて広島に行った。写真でしか見たことがなかった原爆ドームや広島平和都市記念碑は、実物で見ると想像の何倍も迫力があり、真夏なのに寒気がした。世界中の人々の思いがここに集まっていると思うと、原爆がどれほど最悪なものだったかがよく伝わった。特に、平和記念資料館ではよりリアルな写真や映像、実物などを見て、どんな思いで治療を受けていたんだろうとか、家族を失った人はどうやって生きていたんだろうとか、考えるほど苦しくなった。原爆なんてなければ、日本や世界にもっと貢献できた人がたくさんいたかもしれないのに。誰も原爆なんて望んでいなかったのに、一瞬にして未来を奪われたのだ。それなのに、今の私達は命を簡単に見すぎている。私も人に対してひどい言葉を言ったことがあるし言われたこともある。でも、今回の平和の旅を通して、もう二度とそんなことを言わないと決めた。原爆で亡くなってしまった人が聞いたら、きっと悲しくなってしまうから。

この二日間は私にとって大きな経験となったし、もっと色んな人に知ってほしいことがたくさんある。だから、これまでの七十四年間を無駄にしないよう、世界中が平和で優しい人であふれるよう、少しずつ周りに教えていきたいと思う。

参加した生徒の集合写真